

2019年度活動報告

本研究は、本学のテーマ演習において2012年度に立ち上げられた授業を土台とし（12年度「モデリング」、13年度以降「奥行き感覚」と改題）、16年度に「『奥行き感覚』を求めて—新しい奥行き知覚から導かれる新共通感覚の構築」という課題名で科学研究費を獲得している。これまでの研究では、古今東西のさまざまな美術作品の中から、可能な限り偏りのないように、その都度、参加者間の協議によって対象とする作品（作家）を選び、その造形の仕組みに焦点をあてて検証を行ってきた。近年では縄文土器、洞窟絵画、マティスのカットアウト作品などの様々な時代、ジャンルの作品を研究対象とし、実見と考察に加えその仕組みを読み解くための制作課題を行い検証するという手法で研究を行ってきた（概要については、『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第61～63号に掲載）。

今年度は、科学研究費申請の際に設定した研究期間の最終年度を翌年に迎えるにあたり、テーマ演習を活用した具体的な研究活動の最終年度と位置づけ、これまで取りこぼされてきた内容に焦点をあてると共に再検証が必要となる課題について取り組んだ。また継続的に調査を行っている縄文土器の造形について、長野県の複数施設にある特徴的な土器群を実見し検証を行った。

まず、これまで取りこぼされてきた内容としては、美術作品の内に奥行き感覚を見つけ出す視点から離れ、現実空間を造形することで現れる奥行きとして「日本庭園」を検証対象とした。この課題では、実際に天龍寺の庭園に赴きその空間を体験することから始め、そこに現れる空間と作庭の関係をいくつかの造形課題を行うことで検証した。また再検証の必要な課題としては、改めてジャコモッティのモデリングについて扱い、ジャコモッティ作品に見ることが出来る対象との距離を生み出すモデリングについて、実際に粘土により塑像制作を行うことで塑像作品が対象までの距離を生み出す仕組みについて検証を行った。この課題でも参加者の実見を重視するために豊田市美術館の協力のもと、特別に鑑賞の機会を作ってください、ジャコモッティ本人が見たであろう距離と光線を再現し、そこに現れる奥行き感覚を参加者で共有し検証を行った。縄文土器の調査では、長野県周辺から出土した縄文土器群の造形をある程度まとまってみる機会を作ることができ、この研究当初に調査した新潟県周辺の縄文土器の造形とは全く異なる仕組みを有していることを理解することができた。とはいえ、共通して言えることは、いずれも自然界にある動植物はたまたその現象や成長のサイクルをあくまで3次元のまま抽象化することで、その造形を複雑なものにしているということである。一旦2次元に置き換えるという経験がもとより存在しなかった縄文の人々が造形を行う際に働かせていたであろう空間意識について思いをめぐらすことで、単なる意味としての装飾として扱われてしまいがちである縄文土器の造形を、より豊かなものとして感じることができた（以上の内容については『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第64号に詳細が掲載される予定なので、そちらを参照されたい）。

次年度はいよいよ研究の最終年となり、これまでの研究成果をまとめた展覧会を2020年12月初旬にギャラリー@KCUA（@KCUA 1）で開催する予定である。またこの研究の参加者それぞれが各自の立ち位置から個別の考察を行い、それらをまとめた論文集の作成を目指している。この研究のこれまでの広がりがそのようにひとつの形となり、研究当初に目指した通り、奥行き感覚が自明の評価軸として受け入れられるようになればと思う。